おおさか発 プラスα　火 くらし　水 文化　木 探求

ご意見、ご感想をお寄せください。
毎日新聞「プラスα面探求」係
〒530－8251（住所不要）
ファクス（06・6346・8204）
o.talk-news@mainichi.co.jp

ニュースUP

現場考　アーチェリー大国の秘密

日韓　育て、育てられ半世紀

史上最多のメダルを獲得したロンドン五輪で、アーチェリーは男子個人の古川高晴選手（28）＝近大職員＝が銀メダル、女子団体も初の銅メダルに輝き、脚光を浴びた。活躍の背景にはアーチェリー大国・韓国から招いたコーチの存在があった。その源流をたどると、アジアのトップとして名をはせた日本との深い関わりが見えてきた。

社会部・村松洋

部員を指導するコーチの金清泰さん（中央）
＝奈良県生駒市の近大洋弓部練習場で、宮間俊樹撮影

海峡渡った「父」

アーチェリーは1959年に東京五輪（64年）開催が決まったのを機に国内にも広まり、72年のミュンヘン大会で52年ぶりに正式種目に復活した。十数年にわたる強化活動が実り、76年モントリオール五輪で道永宏さん(55)、77年世界選手権では亀井孝さん(58)がいずれも銀メダルを獲得するなど「アジア最強」の地位を築いた。亀井さんは「ボウリングブームと相まって、各地のボウリング場に試射場が併設されるほど70年代は人気があった」と振り返る。だが、少子化による競技人口の減少や用具の高額化などで次第に低迷期に入った。

代わりに台頭したのが韓国だった。あまり知られていないが、その韓国に初めて技術指導をしたのは日本のアーチェリーの第一人者で、日本アーチェリー協会（現・全日本アーチェリー連盟）理事長を務めた故小沼英治氏だ。モントリオール五輪代表監督の高柳憲昭さん(75)によると、小沼氏は50年代後半～60年代初め、韓国やフィリピンなどアジア諸国を回って普及に尽力した。韓国アーチェリー連盟の記念誌には「育ての父」として小沼氏の名前が記されているほどである。

同五輪代表コーチで大阪府アーチェリー連盟会長の飯塚十朗さん(75)は74年、ソウルで初めて開かれた日韓交流試合に指導者として参加した。「仮設のアーチェリー場で、技術も日本の一流選手のレベルには程遠かった」という。試合に参加していた現地の青年に「日本のように強くなるにはどうすればいいか」と尋ねられ、「小学生のうちに基本的な打ち方を教えるのがいい。継続して技術を指導できる体制作りも必要だ」と、自身が日本で実現したかった方法を助言した。青年は88年のソウル五輪で代表監督を務めた朴敬来氏だった。飯塚さんは「日本の技術を吸収した若手指導者らが、国の支援も得て韓国独自の強化システムを作り上げた」と話す。

少数精鋭が奏功

ロンドン五輪銅メダリストの早川漣選手(25)のコーチで、長崎国際大講師の金相勲さん(40)によると、韓国のアーチェリー人口は1500人程度で、日本の1万3000人の約12％に過ぎない。だが小学3、4年生から競技を始めた選手らは中学、高校で数多くの国内大会を通して選抜され、韓国代表に選ばれると年間を通して合宿を繰り返す「エリート教育」を受ける。ロサンゼルス五輪（84年）女子個人で初の金メダルを獲得。ソウル五輪から新設された団体では、女子が7連覇するなど80年代以降、世界の頂点に君臨している。

近大洋弓部の山田秀明監督(61)は、韓国の指導者をいち早く迎え入れた一人だ。92年バルセロナ五輪で同部から送り出した3選手が予選で敗れた際、韓国人男性に「息子が日本に世話になった。韓国に練習に来たらいい」と声を掛けられた。男性は朴敬来氏の義父だった。以来、同部は韓国で合宿を行い、十数年前からは韓国人コーチを日本に招き、継続して指導を受けている。山田さんは「選手の骨格に応じた打ち方や繊細な指遣いの指導は韓国人コーチならでは」と評価する。

シドニー五輪（00年）金メダリストの金清泰さん(32)は、同部6人目の韓国人コーチで3年前に来日した。ロンドン五輪で銅メダルを獲得した川中香緒里選手(21)＝近大3年＝は入学時、筋力不足で矢の軌道が不安定だったが、金さんの指導で筋肉トレーニングに重点を置いた結果、32ポンド（約14・5キロ）だった弦を引く力が、40ポンド（約18キロ）に増えた。川中選手は「体幹も鍛えられ、速くて安定した軌道で矢が飛ぶようになった」と効果を認める。

「感覚競技」。金清泰さんはアーチェリーをそう表現する。特に重視するのは、弓を握ったり、弦を引く際の指先の感覚だ。「一定であれば、何万本打っても矢の描く軌道は変わらない」。来日当時は日本語が話せず、コミュニケーションを取るのに苦労したが、辞書を手に選手一人一人と向き合った。弓のグリップも金さんがパテで調整し、「それぞれのベストショット時の感覚を追い求めた」という。

「いつか再び」

日本では現在、和歌山県や長崎県などで5人の韓国人コーチが指導にあたる。

県立和歌山高校アーチェリー部で金哲敏さん(27)＝元アイルランド代表コーチ＝の指導を受ける3年生の津田勇志さん(17)は自己ベストが1289点まで伸び、国内トップ級に迫る勢いだ。同部の森毅監督(35)は「彼らの指導を受けた生徒らが活躍し、日本が韓国と肩を並べる日がくれば」と期待する。

竹島の領有権問題を機に日韓関係の冷え込みが懸念されているが、取材に対し、韓国人コーチらは「政治とスポーツは無関係。教え子が強くなってくれればうれしい」と口をそろえた。

過去の日本の指導をきっかけに、韓国はアーチェリー大国を築き上げた。日本もロンドン五輪を機に競技人口の拡大を図ろうと、全日本アーチェリー連盟が11月に小学生向けの親子大会を計画するなど復権に取り組む。相手の強さを認め、貪欲に学ぶ姿勢が日本アーチェリー界の復活につながると信じたい。